

# 文藝春秋 SPECIAL

BUNGEISHUNJU 2015 冬  
 平成21年3月23日第三種郵便物認可 平成27年1月1日発行(1,4,7,10月1日発行)別冊  
 強靱な知が悲観論を吹き飛ばす

冬

文藝春秋 SPECIAL

中国、アメリカに勝つ!

日本最強論

文藝春秋

## 新発見 福田恆存 講義録

# 日本最強論

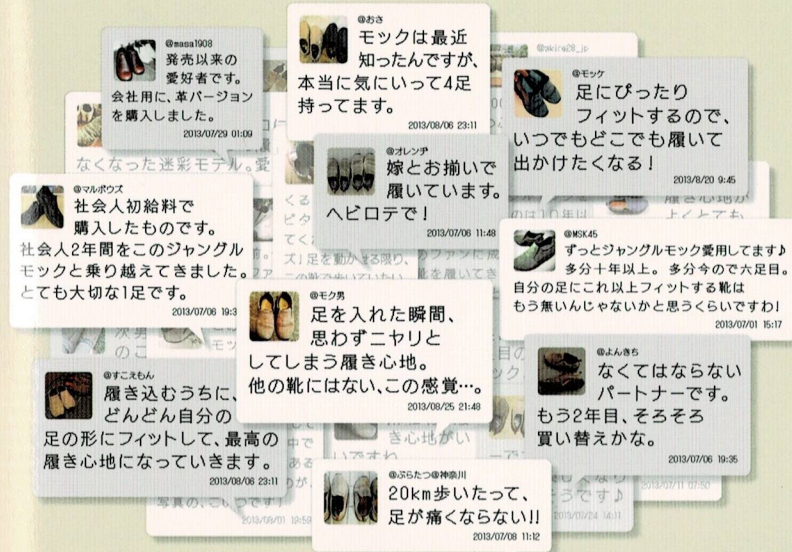
衝撃レポート「日本の実力2015」

- 立花隆 富山和彦 東大口ボ元CFO 橘玲
- 鈴木敏夫 ウスビ・サコ 渡辺京二 福田和也
- 中野剛志 三浦瑠麗 石原慎太郎 磯田道史 ほか



総力朝日新聞・ソニー 日本型組織の崩壊

凸版印刷株式会社印刷  
 Printed in Japan



### 愛され続ける理由があります。

1998年の誕生以来、いまでもなお、多くのリピーターを惹きつけているジャングル モック。スッと履けて、フィット感がよく、長時間歩いても疲れにくい。元祖コンフォートシューズとして、1,200万足以上も売れ続け、多くのシリーズにその履き心地のよさが受け継がれています。  
 \*2013年現在 全世界累計(自社調べ)



メレル ストア直営店 -----  
 □池袋店 (サンシャインシティアルバ2F) / 03-5992-1540 □川崎店 (アトレ川崎 5F) / 044-200-6648  
 □新浦安店 (モナ新浦安A館 1F) / 047-381-2611 □みなとみらい店 (コレットマーレ 4F) / 045-681-5862  
 □小田急ハルク店 (小田急ハルク B1F) / 03-5323-2823

メレル オンラインストアでも直接ご購入できます。  
 メレルオンライン 検索  
 www.merrell.jp tel.03-3665-0086



4910077030151  
 00870

雑誌 07703-01

## 賢人、日本の未来を予言する

人類はどこへ向かうのか

二つに割かれる日本人 渡辺京二

ジブリとモノづくりの運命

アジアで日米アニメ戦争が始まる 鈴木敏夫

日本企業で働く外国人に聞きましたニホンのカイシャ9つの不思議 森健

グローバル人材と女性はカヤの外

日本ニューエリート of 苦悩 三浦瑠麗

仲良しコミュニティからガバナンスへ

日本に眠っている「政治」の遺伝子 竹井隆人

『昭和天皇実録』徹底解説

## 昭和天皇三つの顔 半藤一利×保阪正康

表紙：野口哲哉「THE RED MAN 2013」 写真：竹下聡 編集協力：石井謙一郎、伊田欣司、浦谷隆平、神長倉伸義、鈴木健一、山本徹美 デザイン：鶴丈二

あるとき、ヨーロッパから来た世界的な社会学者にインタビューする機会がありました。いま日本人はこの国の将来についてとても悲観している、と口にする（正確には、通訳してもらった）、彼は訝しげな顔をして、こつ答えました。私の見るところ日本には何の問題もない。高齢化？ 人口減？ それが日本人と日本の社会にとって解決不能な困難だとはまったく思えません、と。

それから日本の未来について悲観的な見通しに触れるたびに、こつ自問するようになりました。私たちは自分の姿が正しく見えているのだろうか？ 相次ぐ状況の激変に、対応するのが面倒になっているだけではないのか？ そこで、この特集では日本の棚卸しをやってみようと考えました。これまで築き上げてきた資産、実力、直面している問題点、そして世界各国との徹底比較。

日本には多くの強みがあります。たとえば科学技術。今日明日の企業の株価ではなく、ノーベル賞級の研究、開発が営々と連なっていることが、未来の日本の指標です。アメリカのリーダーシップが揺らぎ、中国の成長にも驕りが見える今日、超大国ですら、不安定化の危機を抱えています。日本社会の安定性と、外からのインパクトを素早く取り込む吸収力を自覚し、フルに活用すべき時です。

日本最強論。二〇二五年の常識」を、一足早くお届けします。

# 仲良し「コミュニティ」からガバナンスへ 日本に眠っている 「政治」の遺伝子

厄介な「他者との共同」。しかし、そこが真の「政治」であり、それは〈まち〉から始まるのだ



政治学者

竹井隆人

私は昨今の「政治」というものを眺めていて、いつも思うことがある。果たして「政治」は近代以前に比べ向上した、といえるのだろうか、と。おそらく私以外の政治学者を含むほとんどの人びとは、現代の「政治」はデモクラシーによって人びとの意思が広く反映されるのだから、それと対極の専制状態にあった旧体制よりも格段に進歩している、と無条件に信じているのだろう（私のような懷疑を口にする方を他に見聞きすることがほばないのだから、そうに違いない）。しかし、デモクラシーとはすべての人びとが「政治」の主役たるべきことからすると、果たして我が国の現状に照らしそう言い切れるのだろうか。

読者には「政治」などと申すと何やら大仰なこと、

すなわち、新聞やテレビ等で報じられる永田町の政争劇ばかりを思い浮かべる方も多いことだろう。しかし、「政治」とは複数の人間のいる社会の行く末を決める「集団的決定」を巡る作業を指すのであって、ゆえに企業、学校、そして家族を含むあらゆる人間集団に欠くべからざるものであり、如何なる人間も「政治」から逃れ得ぬはずである。しかし、その「他者との共同」を前提とした、個々の人びとの「政治」の能力は進歩どころか、逆に退化しているのではないか、というのが私の見立てである。

我が国でもよく知られる政治哲学者のハンナ・アレント（先年に公開された彼女を主題にした独映画は我が国でも評判となった）は、必ずしも現代の「政治」の退

化を言いたかったのでもあるまいが、古代ギリシャにおけるデモクラシーを「政治」の理想として崇め、また、その〈まち〉はただ家屋を寄せ集めた「集塊」に過ぎぬのではなく、「政治」による一体性を有していたことを説いた。私は政治学者だが、実務として〈まちづくり〉に関わり、〈まち〉を研究の主題に据えてきた。本論では、彼女の言うような「政治」が息づいた〈まち〉がかつては我が国にも存在したことに触れ、またそれをもって現代に至り著しく鈍麻しているように見受けられる人びとの「政治」の能力を覚醒させる鍵を〈まち〉に求め、論じることとしたい。

## 「コミュニティ」と消費

我が国の〈まちづくり〉においては、必ずと言って良いほど「コミュニティ」なるコンセプトが要求される。この用語は多義的だが、社会そのものを指す場合のほか、私が見るにその社会内での人びとの人間関係の意味合いの方がむしろよく用いられるように思う。それも、この人間関係とは、生活が相互扶助されている状態をいうのではなく、それぞれの生活は相互

不干涉としつつイベント等を介した表面的な相互交流が活発な様をいう。よって、私はこの意味での「コミュニティ」について「他者との共同」を「仲良し」に転化し、「政治」を減退させた元凶として、かねてから批判の対象としてきた（拙著『デモクラシーを〈まちづくり〉から始めよう』平凡社など）。実際に〈まちづくり〉の現場では、このような「コミュニティ＝仲良し」が重要な「集団的決定」を迫られる局面では得てして瓦解するケースも散見されるからなのだが、こうした拙考は世の大勢を占める「コミュニティ＝仲良し主義者」からはとかく胡乱な目で見られがちである。ただ、これを消費という観点を交えて論じれば、少しはご理解いただけるかも知れない。

私はいま、高名な米政治学者ベンジャミン・バーバーによる著作『消費が社会を滅ぼす（仮題）』の翻訳作業を進めている。同書の示唆するところは、世に生活必需品が十分過ぎるほど行き渡っていても消費主義がその進撃を止めず、奢侈品や嗜好品に対する消費欲を掻き立てるよう人びとを幼稚化し、「政治」を蔑ろにするよう仕向けていることにある。私は以前に同様

のことを「自由」をキーワードに論述したことがある（拙著『社会をつくる自由』ちくま新書）。すなわち、思うがままに消費する放恣<sup>ほうし</sup>としての「自由」が幅を利かせれば、「他者との共同」を如何に構築するかという意味での「自由」、つまり「政治」を体現する「社会をつくる自由」は大きく減退するのだ、と。

たとえば戦前、あるいは戦後の物資欠乏期、人びとは風呂場や便所、炊事場などを共用するのが当たり前だったのが、それらを経済成長につれて次第に自宅内に取り込んでいった。これは生活必需品が充足するに従い、その次に人びとが「他者との共同」という厄介事を排除した利便性を追求していったことの表れであり、今日では「引きこもり」といつて同一住戸内でも「他者との共同」を介在させない事例も顕在化している。さらに、分譲マンションに至っては、共用部分の共同管理という「他者との共同」が前提となるはずが、むしろ一戸建てよりも近所付き合いが少ないことが「ウリ」とされ伸長してきた矛盾もある。

人びとは幼稚化によって人間関係における「他者との共同」という「困難」を忌避するが、それにより進を前提とした「政治」は成るのだろうか。

#### 「コミュニティ」から「ガバナンス」へ

私は「他者との共同」を前提とした「政治」のためには、「コミュニティ＝仲良し」から脱し、「ガバナンス」を確立することが必須のように思う。「ガバナンス」なる語は近年になって多用される傾向にあるが、その意味するところは他者を含む社会を統べるために、ルールの制定やその執行のための「政治」の精度を高めることに収斂されよう。この多くの人びとの意思を統合する「ガバナンス」の契機は保安、すなわち大掛りな外敵による攻撃に対し、独りではかなわぬ防衛を「他者との共同」で果たそうとすることで生じる場合が多い。

我が国には国家意識の不在を指摘する声があるが、それは古来より大陸諸国と異なり四海に囲まれた天然の要害に安住するのが常態だったためである。故にその常態が揺らぐ非常時にはじめて国家意識が芽生えるのであり、たとえば日本国の誕生が七世紀後半とする説が根強いのは、朝鮮遠征による白村江の敗戦、さら

行した生活の個別化ないし孤立化もあって、「コミュニティ＝仲良し」という「安易」な人間関係を求めるため、フェイクブックなどの消費商品は隆盛するのである。これらの現象は、消費主義が「社会をつくる自由」を退潮させて生じた空白を「コミュニティ＝仲良し」で埋めていく戦略のようにも映り、これは見ようによっては消費主義本位のマッチポンプともいえるのだ。

前述のアレントは、「政治」にとつて人びとの相互交流などは身内の「おしゃべり」に過ぎぬと指摘したが、この幼稚な「コミュニティ＝仲良し」を社会の組成原理とする限り、その「仲良し」以外の他者は排除され、一方でその「仲良し」内では論争自体が厭われ、異論の表明さえ許容せぬ雰囲気と同調圧力となって「社会をつくる自由」を押し流してしまふ。「コミュニティ＝仲良し」の支配する社会は、完全に人びとの意見が同一であつて「政治」を要しないか、もしくは対立を顕在化させないよう同調圧力を掛けて「政治」を放棄しているか、のどちらかなのだ。では、如何にすれば「社会をつくる自由」の溢れる、「他者との共同」

に隋、唐と相次ぐ強大な統一政権樹立による大陸からの脅威に対し、律令という法規を整えて国家体制を確立し、防備を固める必要が生じたからだ。また、明治以後の憲法制定を含む中央集権的近代国家への急速な変貌と大陸への進出は、黒船来航以後の列強による外圧を背景としていた。それが戦後は米国に追従し、また、デモクラシーにより人びと自身が「ガバナンス」を發揮せねばならぬという難事を抱えたこともあつて、再び「平和ボケ」の常態に回帰してしまい、それで国家意識が乏しいようにも映るのだろうか。

このような現代の人びとに「ガバナンス」を意識させ得る舞台は、私は「まち」に揃っているように思う。元来、西欧はじめ諸外国の「まち」は例外なく城壁に囲まれた、いわゆる「ゲートッド・コミュニティ」であつた。我が国の城郭は戦闘要員たる武士のみを收容する施設だが、諸外国のそれは全住民を取り込む「まち」そのものであつた。つまり、世界共通の定義では「まち」とは城壁をはじめ、さまざまな城内の共用施設といった物理的要素のほか、これらの共用施設等を如何に共同統治するかという「ガバナンス」の機能と

を併せてその構成要素としていた。それは農村と異なり、雑多な人びとの集団を統合するには、ルールやその執行が必須だったからだ。

そのような〈まち〉が我が国にこれまで皆無だったのかといえばそうでもない。たとえば中世後期の戦乱時には既存支配勢力が後退したために、自衛のために周囲を堀や土塁で囲む〈まち〉が出現した。なかでも争乱の中心地でもあった京都では保安を目的とした〈まち〉があちこちで組成され、それらを総体化した豊臣秀吉は京都市街全域を「御土居」という「ゲート・コミュニティ」として完成させたのであった。

このような人びと自らが統べる「ガバナンス」を具備する〈まち〉を現代に比定すれば、地方自治体ということになるのだが、その「政治」は数年に一度あるか否かの選挙Ⅱ投票のみに限定されるなど形骸化しているのが実情である。そもそも、この現代日本の地方自治体の成り立ちには不備がある。たとえば米国ではシティやタウンといった地方自治体は住民の請願を受けて成立するもので、地方自治体など存在しない地区もある（未存在地区の方が広い）のに比べ、我が国

でもよい」とも私は思うのである。

#### 論吉の〈まちづくりに〉

かの福澤論吉は、「古の政府は民の力を挫き、今の政府はその心を奪う。古の政府は民の外を犯し、今の政府はその内を制す」と論じた。江戸幕府が人びとを強制的に抑えつけたのと異なり、明治政府は共用の施設やサービスを充実させて生活利便を供することによって人心を蕩かし、人びとがただ崇める存在となつたことに警鐘を鳴らしたのだ。現代も同様、もしくは「他者との共同」がより減退しているためにますます、共用施設等の共同管理については人びとが思考停止し、「お上」を恐れるというより、むしろそれに依存してしまっている。

福澤も親しんでいたという仏政治家のアレクシス・ド・トクヴィルは、デモクラシーには人びとを確実に「隷従」に導く危険が潜むと喝破した。それにならえば、戦後社会の過剰なる平等化は、人びとの同化による「コミュニティⅡ仲良し」を促し、社会を主体的に担う「社会をつくる自由」を放棄させた、ということだ

の地方自治体とは「お上」から全地区が漏れなく授けられたものであり、このこと自体が「自治」なる語義とは矛盾を来たしているからだ。

米国ではこの数十年、郊外で量産された「ゲート・コミュニティ」の如き居住区では、共用の施設やサービスを共同管理する「私的政府」が頭をもたげてきた。それは、言うなれば我が国での分譲マンションの管理組合の如きものだが、ルール制定やその執行権能においてより強力である。ただ、それでも執行部に「政治」を丸投げし、「コミュニティⅡ仲良し」にかまける風潮において、米国の「私的政府」でも我が国の管理組合と重なる部分がある。

よって、「ガバナンス」にはルールや執行機関が存在するのみならず、それに人びとが絶えず意思を集約させる「政治」が機能せねば意味をなさない。たとえば、我が国では憲法が占領時に米国から押し付けられたこともあって、やれ改憲だの護憲だの言い騒ぐのが恒例行事となっているが、憲法の内容がどうあれ、その策定や執行において人びとが主体となる実態が伴っていないのはならず、それがなくば「憲法などどう

ろう。福澤はトクヴィルが「デモクラシーの学校」と位置づけた地方自治にこそ「政治」の活路を見出したように見受けられ、それが人びとによる自己統治と、それによる「政治」の能力の涵養を促すはずと考えたのだろう。おそらく福澤の思いを忖度すれば、人びとを外面から拘束した道徳を取り払えば人びとの内面には「コミュニティⅡ仲良し」が侵食し、「政治」の生育を阻み、外形だけの「デモクラシーⅡ民衆による支配」が成立することを言いたかったのではあるまいか。

得てして「他者との共同」は、人間同士の相互交流たる「コミュニティ」のことに同一視されるため、それによる「仲良し」や友愛をただ単純に信じる方は少なくあるまい。しかし、〈まち〉のみならず、市町村や国家という大きな社会について、その全構成員と「仲良し」となることなど当然ながら不可能である。おそらくはそれを誤魔化すために、昨今流行の「絆」も同質だが、人びとの情念に心地よく響く精神主義として「コミュニティ」が言い立てられてきたのであり、これらの生暖かい観念に人びとはただ酔い痴れているに過ぎまい。政治家にもことさらに友愛めいたフレー

ズを口にする者がいるが、それは彼の世評を一時的に高めはするものの、その実態は眼前の課題解決のための「政治」を放り出した態度だと申したら言い過ぎだろうか。「コミュニティ仲良し」が表面的な相互交流に終始する限りはよいが、その交流が深化すればたちどころに友愛どころか憎悪を帯びるリスクを伴う。当然だが人間関係には愛憎ともに半ばするのには、幼稚化は人びとをして、その負の部分（憎悪）を捨象し、正の部分（友愛）ばかりを追い求めさせるのだ。福澤は愛郷心が重要といたが、それは〈まち〉に没入し、その負の部分も呑み込むことで、「仲良し」とは別物の「政治」に対する責任を醸成することを意図したもので、と私は思うのだ。

#### 〈まち〉から始まる

年来、私が主唱しているのは〈まち〉に「私的政府」を設置し、「直接制デモクラシー」を介した政治的過程や決定を通じて、同一社会内のあらゆる見知らぬ他者とも政治的関係を築くことだ。このようなことを申すと、〈まち〉という偏狭な社会ができるだけではな

理を〈まち〉で身につければ、それによって醸成された「社会をつくる自由」がより大きな社会でも発揮されるのが可能だろう。たとえば、保安を例に取れば、自らの生命や財産を保護するために〈まち〉の保安の維持向上を図りつつも、それでもなお対応できないより強大な脅威に対しては、より上位の社会たる国家の保安を意識することができよう。つまり、〈まち〉を介して同様にデモクラシーを奉ずる地方自治体、国家、そして、まだ完成途上ではあるが国連等の世界機構にも敷衍される社会構成原理としての「ガバナンス」を伸長させていくことができよう。

先述したように中世後期の〈まち〉は共同防備を担ったが、近世以後も〈まち〉は町木戸の管理などの保安、また水利や道路などの共用施設の共同管理を担った。こうした共用施設等の「ガバナンス」は近代以後に「公的政府」の所掌に奪われてしまったが、米国では既存市街地を「ゲートッド・コミュニティ」にすべく道路を封鎖するために、道路を「私的政府」の管理下に置く事例も増えている。これはよく批判の対象となる「私有化」というよりも「共有化」ともいべき

いか、とのチャチャが入ることだろう（この手の浅薄な批判者には近年我が国でも評判の米政治学者マイケル・サンデルも含まれる）。しかし、これに対して私が意識するのは、福澤諭吉の「立国は私なり、公に非ざるなり」との名句である。つまりこれを私流に解釈すると、ある〈まち〉が物理的に偏狭であることなどは無関係に、その〈まち〉を自ら担おうとする人びとの意思が「私立」となって、その〈まち〉を包むより大きな社会に対しても、その一翼を担っていく自覚なり責任が生じれば、この「私立」は「公共」を支えているということなのだ。

人びとが国家という「公共」を意識しないのは、それを「公的政府」という自身と関わりのない別物の「お上」と見做しているからだ。よって、拙考のように「私的政府」が〈まち〉を統治し、その「政治」の権能に人びとが不断に関与するならば、人びとに「政治」に対する責任が生じる。つまり、「コミュニティ仲良し」は、その社会の外では通用せぬ「正義」を振りかざす源泉となり、より「公共」の形成を阻害する主因となるが、「他者との共同」という社会組成原

で、このような共同防備は我が国の〈まち〉では「共有化」の契機にはなる余地はまだないのかも知れぬが、一方で道路の老朽化に伴う将来的な維持管理が懸念視されていることからすると、いざ道路を「公的政府」から〈まち〉の「私的政府」の管轄下に置き維持補修を図ることも検討せざるを得なくなるのではないかと私は半ば期待を込めて眺めている。

関東大震災時の首都復興で名を馳せた後藤新平は、人びと自身が市長にならぬと復興事業は進まないと語った。必要なのは人びと一人一人が政治家になることであり、それがデモクラシーの本義である。

〈まち〉を自分たちで統治するという、かつての我が国の先達たちが保有していた遺伝子を蘇生させない限り、「政治」を司る「市民」は我が国には永遠に登場するまい。

「他者との共同」を「コミュニティ仲良し」に転化し、生活を個別化することは、社会や人びとの幼稚化と共鳴するのであり、それが我が国の抱える、そして今後とも覚悟せねばならぬ社会問題であり、「政治」にとつての課題なのである。